2019年３月発行　第195号　題字：佐藤　敬 学長

学園だより

弘前大学広報誌
2019年３月 発行
Vol. 195

弘前大学は2019年5月に創立70周年を迎えます

特集

卒業・修了・退職にあたって

巻頭言　弘前大学長　佐藤　敬
研究室紹介
新任教員自己紹介
けいじばんコーナー
編集後記

作品名：キリン（部分）色鉛筆画　サイズ300 X 140cm
制作者：教育学部生涯教育課程　芸術文化専攻４年　岩谷　亮太

今年も３月末をもって本学を去られる学生、職員の皆さんに向けたメッセージを贈る時期になりました。まさしく、「光陰矢の如し」が年々強く感じられる思いです。

卒業される学生諸君の在籍期間に合わせて、「学園だより」に同様の文章を書いた４年前から今日までの弘前大学を振り返ってみますと、もちろん、多くのことがありました。図書館のリニューアル、COC・COC+事業の開始、新しい東京事務所の開設、人文社会科学部の創設・理工学部新エネルギー学科の設置などを含む教育研究組織の見直しと教職大学院の開設、グリーンカレッジの開校、弘大カフェのオープンなどは、私自身の中で思い出される主な出来事でした。国際化の推進や地域連携の強化においても多くの成果があり、また、入試や教育プログラムに関しても間断のない見直しがなされ、研究面で特筆されるべきは、科学研究費補助金の採択が徐々に伸びてきたことです。これらを支える基盤としての自己財源確保についても、成果が挙がりつつあります。

学生諸君には、これらの取組の多くは“学生教育最優先”の基本方針に則って実施されてきたものであることを理解して欲しいと思っています。よく言われるように、研究における成果も教育と一体です。学生諸君には大学に対する希望、あるいはいくばくかの不満もあることと思い、私はそれらに100％応えてきたとの自己評価はできませんが、当然のことながら、弘前大学は常に、しっかりとした教育の実施を念頭に置いてきたと言ってはばかるところはありません。今後も、そのことを踏まえた歩みを続けていかなければなりません。

因みに、昨年６月の日本経済新聞によると、一部上場企業等に対する調査の結果、弘前大学は今後採用を増やしたい大学の第一位にランクされたとのことです。これは、上に述べたような、大学としての学生教育に関する取組の成果もあるかとは思いますが、それよりも、本学を卒業した皆さんの先輩が社会で大いに頑張って活躍していることの表れと理解しています。今年度末をもって社会に旅立つ学生諸君も、弘前大学の伝統を引き継ぎ、より一層社会の期待に応える存在になってくださるようエールを送りたいと思います。

これらの取組をしっかりと進められたのは、学生諸君が主体的かつ積極的に対応してくれたことが一義的に重要であったのは間違いありません。例えば、地域の方々のご支援の下に進められた学部越境型地域志向科目は、地域課題に関する自主的学習という一見難しい取組であり、今後も検証と見直しを続けていくことが必要ですが、現状では有効に推移していると言ってよいと思います。国際化に関しても、本学独自の“はやぶさカレッジ”には毎年多くの学生がチャレンジして成果を挙げてきました。そのためか、文部科学省の主催する“トビタテ！留学JAPAN”については、本学からの参加は出足が遅れたものの、最近は継続的に採用されています。海外に留学する学生の数も、まだまだ多いとは言えませんが、増加率は大学の設定した目標に届きつつあります。

これらの目標を具体化する上で欠かせないのが、職員の皆さんの力であったことは言うまでもありません。ここでは、職員という言葉で教員と事務職員に対して同等に言及しているのであって、両者の協力が無かったならば、上に述べたような成果は得られなかったに違いありません。特に法人化後、教育研究と地域連携の活動がますます多様化するに伴って、教員には自らの専門を超えた教育活動が、事務職員には従来経験しなかったまったく新たな業務が求められるようになりました。今年は自主的に大学

全体の外部評価を受けることになっており、また、来年には７年に一度の評価機構による認証評価が予定されています。これらを通して、本学の取組は前提のない客観的評価を受けることになっており、最終的にはその結果を待たなければならないものの、現時点での自己評価としては、おしなべてしっかりとした成果が挙がったものと思っています。職員の皆さんに感謝しなければなりません。

この春に本学を去られる皆さんのうち、特に学生諸君の中には弘前を離れる人も多いかと推察します。言うまでもなく、弘前は日本を代表する歴史の街であり、四季の彩をはじめ、豊かな自然にも恵まれています。地域の人々は弘前大学に親しみを持ち、かつその存在価値に高い評価をいただいています。弘前は学問や芸術、思索や創作などに最適な、まさに学都と呼ぶに相応しい街であると信じています。恵まれた環境の中で、弘前大学は今後も高等教育機関に相応しい成果を挙げていくべく決意を忘れてはならないと思いますが、本学を離れられる皆さんも、弘前の地で、弘前大学で過ごした日々を忘れ難いものとして受け止めて下さることを強く願っています。

繰り返し述べてきた通り、今年は弘前大学創立70周年を迎えます。70年に及ぶ本学の歴史や伝統は私たちの財産であり、それらを確実に引き継いでいくことが重要です。特に、70周年にあたって、最近のさまざまな取組や経験を総括し、今後の教育研究に活かしていくことは不可欠です。本学を去られる皆さんには、そのための活動に今後も支援をいただければ幸いであり、可能な限り積極的に参画していただければと願っています。そして、多くの本学関係者と共に、弘前大学の新たな歴史と伝統を創り出していきたいと希望しています。どうぞ宜しくお願い致します。

最後になりましたが、平成30年度末をもって本学を卒業、退職される皆さんに重ねて感謝申し上げるとともに、今後のご健勝、ご多幸を心からお祈り申し上げます。

新たな歴史を共に

卒業、退職される皆さんへ

弘前大学長　佐藤　敬

卒業・修了・退職にあたって

卒業生・修了生

人文学部

4年間を振り返って

人間文化課程　熊谷　昂汰

大学生活が終わりを迎えようとしている今、弘前大学で過ごした４年間を振り返ってみると、実にあっという間に感じられ、またこの時間の速さに恐ろしささえ覚えます。ただそれだけ充実した日々を送れたのではないかと思っています。

大学生活を充実したものにしてくれたものは、部活動だと思っています。思うように結果が出ない時期もありましたが、先輩や同期、後輩の努力している姿が励みになりました。中学一年から約10年間、部活動でバドミントンを続けてきて、特に大学の４年で培った努力で成長しようという姿勢はこれからの人生の糧になると確信しています。また、大学で出会った人で特に部活動の人とは素敵な時間を過ごせたと実感しています。週５日で顔を合わせていれば自ずと仲良くなるかもしれませんが、部活後に飲みに行ったり、週末に集まって一緒に食事したり、そういった時間のなかでくだらないことで笑い合ったりと思い返すと幸せな時間だったなと強く思います。

卒業後は会う時間がめっきり減りますが、大学で授かったこの縁を今後も大事にしたいと思います。

卒業にあたって

人間文化課程　塚本　明洋

早いもので弘前大学に入学してからもう４年が経とうとしています。思い返せば４年前にここに入学を決めたのはいわば、偶然の出会いのようなものでした。関東出身の私にとって雪国は未経験なことの連続で、なぜ弘前大学に入学したのかと少し後悔したことさえあります。

しかし、偶然は連鎖するものなのか、思い付きで入った音楽サークルに没頭することができ、そこでかけがえのない友人と自分が好きだといえるものを見つけることができました。この４年間の大学生活が思い出深く、そして学びの多いものにできたのは、夢中で没頭できるサークルに出会えたからこそだと思います。

また、勉学においても幸運なことに入学前から学んでみたいと思っていた分野を専門的に学ぶことができました。

もちろん、幸運なことばかりではありませんでしたが、振り返ってみると、とても有意義な大学生活が送れたと思います。「環境が変われば、人が変わる」と言いますが、まさにそれを実感した４年間でした。

この春からは、また新天地で社会人生活をスタートさせていきますが、この弘前大学で得た経験を糧に前に進んでいきたいと思います。

ウィトゲンシュタインとの出会い

人間文化課程　三浦　悠平

「語り得ぬものについては沈黙しなければならない。」

この言葉は20世紀の哲学者ウィトゲンシュタインの代表的著作『論理哲学論考』の末尾を飾るものである。私は一つの倫理的立場としてこの言葉に深い共感を覚える。感覚や感情を原理的に共有することのできない他者、世界の存在そのもの、超越的な神、言葉を言葉たらしめる論理、そして倫理。これらが人間の言語の限界すなわち思考の限界、世界の限界を超えたところに置かれるのであるが、何もそのことでこれらの価値が乏しめられるということはない。むしろ、語り得ないものにこそ価値があるのである。たとえば、「君は自首するべきだ」「なぜそうしなければならないの？」「それは善いことだからだ」「なぜそれは善いことなの？」「善いことだから善いことなんだ。」というような会話。善悪の理由のづけの最果てに現れる同語反復。これこそが道徳だ。これは何ものによっても侵されてはならない。これを外から捻じ曲げることは、そのひとを殺してしまうことと同義である。だから私は沈黙する。しかし、語り得ぬものをあえて語ろうと試みる営みは決して馬鹿にされてよいものではない。むしろそれは、勇気あることなのだ。

教育学部

一歩一歩踏みしめて　学校教育教員養成課程　荒内　駿介

有名なことわざで「千里の道も一歩から」というものがあります。どんな事でも１つずつ着実に取り組むことが大切である、という意味のことわざであり私の座右の銘としている言葉でもあります。

大学４年間を振り返ると、座右の銘のとおり、努力の道を走り続けてきた時期であったなと思います。様々な授業や初めてのアルバイト活動、サークル活動、そして友人と大声を出して笑った毎日。全てに全力で一歩一歩踏みしめて歩んできました。それら全てが今も鮮明に思い出せるかけがえのない思い出です。

自分は、来年度から生まれ故郷弘前を初めて離れ新天地へと旅立ちます。初めての一人暮らしで頼る人もほぼいなくなります。不安や迷いに押しつぶされてしまうこともあるかもしれません。しかし、そんな時こそ「千里の道も一歩から」という言葉を胸に新天地で出来た友人に思い切り頼りながら、私なりの努力を一歩一歩積み重ねていきたいと思います。

最後に、４年間、支え続けてくれたと共に、新天地で教員をすることを快諾してくれた母親に最大限の感謝を込めて終わりとさせていただきます。ありがとうございました。

卒業にあたって　学校教育教員養成課程　田端　春香

４年前、希望と不安、そして少しの劣等感がきっとありました。憧れの大学生活、幼稚園や小学校の頃からずっといっしょだった友人たちと離れ、知らない人たちに囲まれた入学式から４年経とうとしていることが信じられません。

この４年間は、私の第二次成長期であったと言えます。今まで当たり前だと思っていたことが、当たり前ではなくなっていきました。「どうせみなさん現場に立った時に「ああ、それはいい視点だね。○○君調べてきてよ」とか適当なこと言うんですよ」「田端さん完璧主義者でしょ？」「本当にそうなのか？それはいつからや？」様々な先生方からかけられた言葉の数々。幼いころから漠然と教員になろうと考えていた私に大きな衝撃を与えてくれました。

そして、末っ子気質ですぐ人に甘えてしまう私を暖かく優しく、そして時には厳しく接してくれた友人の存在があったからこそこの４年間を乗り切ることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。

４年目の一月の下旬に私のアパートの窓は雪により破壊されましたが、私の代わりに破壊されてくれたと思って、４月から私なりに頑張っていきます。

４年間を通して　学校教育教員養成課程　宮下　健司

大学生活の４年間は長いようでとても「短い」というのが今の気持ちです。

まず、教育学部で教員に関わる様々な学びをすることができました。「教員になりたい」という目標をもって入学した１年生の４月から、講義では知識を得て、実習では現場での経験を積めたのは、今後の教壇に立った際の支えとなり財産です。

次に部活動です。バドミントン部に所属して、競技を続けてきました。大学では学生のみで運営をするので、練習メニューや会計などほぼ全てを自分たちで管理しなければなりません。部員全員で協力し時には大変なこともありましたが、競技に改めて向き合えました。

３つ目はアルバイトです。塾講師として約４年間子どもたちに授業をしてきました。学生ですが一人の「講師」として様々な経験をしました。無事に終えることができたのは、支えて下さった先生方、そして子どもたちのおかげであったと思っています。

最後に、大学生活では一人暮らしなど初めてのことばかりでした。青森の地を訪れることも初めてだったので、不安が常にありました。ただこうして終えることができたのは、温かく見守ってくれた家族、指導してくださった先生方、そして出会った友達、先輩、後輩のおかげです。本当にありがとうございました。

医学部医学科

充実した大学生活を振り返って　医学科　石橋　尚弥

2013年に弘前大学に入学して、あっという間に６年生になってしまいました。２年間の浪人の後、生まれ育った千葉の地を初めて出て、弘前の地に来て多くの経験をすることが出来ました。初めて一人暮らしをして、家事全般一人で出来るようにもなりましたし、雪道で転ばないように歩くことが出来るようになりましたし、津軽のことばを聞き取れるようになり、大体言いたいことを理解できるようにもなりました。

また、今までやったことのなかった茶道を始めることが出来ました。国際医療研究会というサークルでは、長崎の熱帯医学研究所に２回も行かせていただき、実際にアフリカのガンビアで活躍されている外国人の先生方とも交流することができました。

一生付き合っていきたいと思える友達と出会うこともでき、釣りしたり将来について語りあったりしました。街中を走る用の自転車で青森空港まで行ったこともありました。

勉強や医学という面では、弘前という地は自然に恵まれており、リフレッシュするのに、白神や十和田湖に行ったこともありました。青森県は医師不足で短命県返上を目標に患者さんを大切にする熱い先生方が多いなと感じました。実際の臨床現場を経験する中で、目標となる先生方に出会うことも出来ました。

本当に充実しすぎて語りきれないですが、本当に楽しい学生生活でした。

大学生活を振り返って　医学科　小田切くるみ

先日医師国家試験を無事終えて、残る大学生活のイベントも卒業式のみとなりました。この６年間は長いようであっという間だった気がします。この６年間で私が強く感じたことは、人との出会いや繋がりの大切さです。医学部は勉強漬けの毎日でもありますし、部活動との両立や精神面でも大変だと感じることが多々あり、医師になって人を救いたいという思いだけでは乗り越えることが難しいことも、周りの仲間がいたからここまでやってこられたと感じています。

私は軟式テニス部でたくさんの先輩や同期、後輩、OB・OGの先生方と出会うことができました。嬉しいときは皆で喜んで、辛い時も切磋琢磨し合って、同じ目標をもつ仲間との繋がりは本当にありがたく心の支えになりました。

医師という仕事は日々人との出会いや繋がりの毎日だと思います。医学知識だけでなく、この６年間で学ぶことができた出会いや繋がりを大切に、立派な医師になれるよう励んできたいと思います。お世話になった先生方、同級生や部活の皆、実習で出会った患者さん、応援してくれた家族に感謝の気持ちでいっぱいです。６年間本当にありがとうございました。

医学研究科

大学院4年を終えて　医科学専攻　小山　文望恵

弘前大学を卒業後、県内の病院で初期臨床研修を終了し、産婦人科教室へ入室と同時に大学院に入学しました。大学院１年目は関連病院勤務だったので、講義は遠隔で受講しましたが、学務の方に必要な機器の貸し出し、手続きなど丁寧に対応いただき、不便なく受講することができ、感謝しています。大学院２年目の秋に附属病院勤務となり、１年間はみっちり臨床に励み、大学院３年目の秋から本格的に研究期間となりました。実験に関しては細胞培養の仕方も分からない状態からのスタートであり、たくさんの先生方に御指導いただき感謝しています。しかし、附属病院、関連病院での外来、当直業務と並行しながらの研究生活だったので、なかなかまとまった時間がとれず、実験が進まないこともありました。１日24時間の短さを痛感した１年間でした。大変なこともありましたが、基本的な実験の手技や評価方法、データのまとめ方などを学ぶことができ、今後医師として生きていく上でとてもいい経験となりました。暗い部屋で何時間も顕微鏡と向き合った日々も今となってはいい思い出です。実際臨床現場で治療抵抗性の患者さんを目の当たりにすると新たな治療法の必要性を感じますし、そのために当教室で継続してきた研究に加わることができ、それが新たな治療法に少しでも繋がる可能性を考えるとこの上ない喜びです。

臨床と研究を両立できたのは、御指導いただいた先生方、励ましていただいた方々のおかげであり、この場をお借りして深く感謝申し上げます。大学院での経験を生かし、今後の診療に精進したいと思います。

医学部保健学科

大学生活を振り返って

看護学専攻　菊池　祐衣

４年前の自分と今の自分を比べると、たくさん成長し変わることができたと感じます。知らない土地へ赴くことや、初めての一人暮らしに不安を感じていた入学当時が昨日のことのようです。

私は看護師免許だけではなく、看護の高校の教職免許取得にも挑戦し授業や実習に臨みました。これまで指導を受ける立場であった私が、高校生に対し指導をする立場になったことはとても貴重な経験でした。悩むことや戸惑うこともありましたが、得るものもたくさんありました。恐れず挑戦できたことは自分の財産になったと思います。

看護の授業や課題、実習は想像以上に大変で、それにサークル活動やアルバイトなどが加わり毎日を忙しく過ごしましたが、そのような日々も友人や家族など支えてくれる人たちがいたから乗り越えることができました。ここで出会うことができたたくさんの人たちに本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちはずっと忘れないようにしたいと思います。

大学生になってたくさんの新しいことに挑戦し、たくさんの人に出会って、自分の世界が大きく広がりました。４年間の経験をこれから歩む新しい道への力にし、頑張っていきたいと思います。４年間、本当にありがとうございました。

大学生活を終えて

理学療法学専攻　本間　良和

私が弘前大学に入学して４年の月日が経ちました。入学した当初は、理学療法士という職業について漠然とした考えしかありませんでした。同期の皆様の中には、父が理学療法士だから、スポーツで怪我をしてリハビリでお世話になったからなど、理学療法士を目指す明確な理由を持った方々が多かったことを今でも強く覚えています。入学当初の私にそこまでの強い決意などはなく、本当に理学療法学専攻で良かったのだろうかと不安に感じたこともありました。しかし、一度入学したからには最後までやり遂げると決意し、４年間の講義や実習に励んだ結果、理学療法士の重要性や魅力などを感じ、本当に理学療法学専攻で良かったと思えるようになりました。

卒業に至るまでの道のりは、決して私一人では乗り切ることはできなかったと思います。様々な面で支えてくれた家族。大学生活の楽しさや厳しさを共有した仲間。勉強等を指導してくださった先生方。ここまで影響を与えてくださった皆様のおかげで今の私があると強く感じています。本当にありがとうございます。４月からは、また新たな環境での生活となるので、これから先も頑張りたいと思います。

保健学研究科

学生生活、そしてこれからの自分

保健学専攻　吉田 千賀雄

高校を卒業し、浪人して地元福島から鹿児島へ、そして青森へ。日本を縦断しつつ弘前に落ち着いて生活し始めたのがもう６年前…。あっという間であり、しかしたくさんの思い出が詰まった、自分だけの濃密な学生生活でした。

いま、学生としての自分をどれだけひいき目に振り返ってみても、模範的な学生だったとはとても呼べません。試験は一発でパスできず、アルバイトもそこそこに、住んでいた寮の仲間たちと騒いでばかりいました。それでも、先生に恵まれ、先輩・後輩に恵まれ、友人に恵まれて今の自分があります。ひとりでは絶対にここまで来れませんでした。もしかしたら、ここはまだスタート地点で、右も左もわかっていないままに社会に放り出されるのかもしれませんが、それでもたくさんの人との出会いを宝物に、一人じゃないことを武器にしてマイペースに立ち向かっていきたいと思っています。

学生生活の中では、とにかく自分が頑張るしかないときもありますが、ひとりで抱え込まないこと、ひたむきに続けることができるなら、何であれ意外と何とかなったりするものです。後輩の皆さんも、自己中心的思考に気を付けつつ、「マイペース」に頑張ってください。応援しています。

最後になりますが、大学生活においてお世話になりましたすべての方々、本当にありがとうございました。

理工学部

卒業にあたって

物質創成化学科　佐々木　創

私が弘前大学に入学し、早や４年が経とうとしています。期待と不安を胸に入学した日がついこの間のように感じられるほどあっという間の４年間でした。

この４年間弘前大学で生活し最も感じたことは、大学生活は「自由」であるということです。勉学に励むもよし、部活動やサークル活動に励むもよし、アルバイトをしてもよしと様々なことに挑戦することができます。私もサークル活動に参加したり、気の向くままに旅行するのが好きだったので、よく長期休みには一人旅をしていました。ですが、その「自由」には責任が伴うことを忘れてはいけません。自由には責任が伴う、言葉ではわかっていても高校までの生活ではあまり実感できないことだと思います。大学ではそれを肌で感じることができ、私にとって良い経験になりました。何もやることがない「自由」ほどつらいものはないと私は思いますので、後輩の皆さんには自分の行動に責任をもって様々のことに挑戦を続け、有意義な大学生活を送ってもらえればと思います。

最後になりましたが、楽しい時間を共に過ごしてくれた友人、指導してくださった先生方等、そして４年間支えてくれた両親に感謝いたします。

理工学研究科

弘前での６年間を振り返って

理工学専攻　稲垣　翔麻

私は、2013年に地元の三重県から出てきて弘前大学に入学し４年間を過ごし、弘前大学大学院に進学して、気付けば今年で弘前に来てからすでに６年の月日が流れていました。

弘前に来て、１年目の冬は自分にとっては経験したことのないことばかりでした。なぜなら地元ではほとんど雪は降らず、降ったとしても数cmといった状態です。そのため雪道に慣れておらず、大学に行くまでに何回も滑って転び、これを何度も経験することになるのかと思いつつ大学に向かって歩いていたことを思い出します。そのような弘前の冬でしたが４年目には雪道でも転んでしまうことは少なくなり慣れてきたと思うようになりました。

弘前大学での講義などの経験を通じて大学院への進学の思いが強くなり、大学院への進学を決めました。弘前大学大学院での日々は学業と研究の毎日でしたが、それがうまくいかないことも多くありました。そのような時は先生や同じ研究室の人と議論などを行うことによって１歩ずつ進むことができました。私はこの春から博士後期課程に進学します。これからはこの６年間を糧にさらに成長していきたいと思います。

日本での留学生活

安全システム工学専攻　黄　鵬瑞

大学時代からずっと数学を勉学してきた。修士論文では、非負実数を要素とする正方行列の通常行列積に関する平方根は、再び非負要素を成分にする課題を考えました。しかし、この問題に一気に取り組むことはかなり困難で、研究に行き詰まりを感じてきて、研究がなかなか進まないことも分かってきた。2014年、指導教官の中里　博教授は台湾で講演を行い、当時私は聞きに行った。私の研究分野は中里先生とほぼ同じだが、問題を取り扱う方法が違う。修士論文で使ったのは組み合わせ論といった離散的な手法で、先生が用いているのは解析学である。なので、先生の得意な代数曲線論を習おうと思っている。また、コンピュータースキルも研究遂行の上で重要と考えられるので、その向上に意識的に取り組みたいと思う。もし、中里先生のもとで勉学できれば、自分の研究に役に立てると考えているから、日本に留学したいという思いが一層強くなった。

この４年間、中里先生はいつも相変わらず私を熱心に指導してくださって、非常に感謝している。そして、ロータリー米山奨学会は、留学に必要とする生活費と授業料を援助していただいて、誠にありがたく存じる。

農学生命科学部

大学生活を振り返って

園芸農学科　杉田　青太

弘前大学に入学後から４年間が経ち、卒業を迎えました。本稿の執筆にあたり、大学生活を振り返ると、大学生活の中で多くの方と出会いによって、多種多様な経験を通じて学んだことが、現在の自分を形成していると再認識しています。

大学生活での成長を自らが認識できた点は、希望する進路を選択する力が身についたことです。その選択を行う上で役立ったのは、私が所属している園芸農学科食農経済コース並びに国際食料経済研究室での国内外の農家、卸売市場、食品企業等を対象としたフィールドワークを通じて、多くの方々と触れ合う機会を得たことです。その中で、視察先での皆さんの職務に対するモチベーションの高さと強い責任感を目の当たりにしました。こうしたことから、将来は私自身も真剣に向き合える仕事に就きたいという気持ちが強まりました。今後の社会人生活でも様々な出会いの連続となりますが、大学生活での経験を糧にして好奇心を保ちながら、色々と吸収して過ごしていきたいです。

最後になりますが、この場を借りて充実した大学生活を共に過ごした友人や先輩・後輩をはじめ、指導頂いた先生方、そして入学から卒業まで支援してくれた家族に感謝の意を表します。

農学生命科学研究科

研究について思うこと

農学生命科学専攻　遠藤　赳寛

大学院に進学してから、「自分は何のために研究しているのか」をよく考えるようになりました。私の研究テーマは魚類の行動です。しかも対象とするのは水産資源でもなければ希少生物でもない、マイナーな海水魚。研究の成果がすぐさま公益の増進に寄与するようなことは恐らくありません。でも、大まじめに研究してきました。なぜでしょう。

基礎研究を行う動機は、「誰も知らない現象を明らかにしたいという探求心」と、「研究という行為自体のもつ面白さ」にあると感じます。ある１つの現象に関して、少なくとも現在、自分が世界一詳しいと自信を持って言える。さらに、自分の発見を学会発表や論文という形でいろいろな人に伝えることができる…。こんなに素敵なことはそうないと思います。

魚を追って全国の海に行きました。瀬戸内海で１か月、毎日魚を探し続けたこともあります。楽しいことも怖いこともたくさんありました。こんな経験はおそらく二度とできないでしょう。好奇心の赴くままに探求し、学ぶ。私にとって大学の研究室とは、これを許容してくれる素敵な環境でした。ご指導を賜った先生方をはじめ、支えていただいた諸先輩方、研究室の仲間に感謝するばかりです。

６年間を振り返って

農学生命科学専攻　石橋　諒

「あなた達は凡人です。それを自覚してください。」弘前大学の新入生オリエンテーションでそう言われてから６年が経とうとしている。すべてを大学に身を任せて卒業してしまったら将来に希望はあるのか……。不安になった私は、入学時から何事にも貪欲に取り組むようになった。資格の取得を目指した１、２年生。教育実習とボランティア活動に力を入れた３、４年生。大学院では、学会発表と就職活動に尽力した。尊敬できる先生方や良き友人からの支えもあり、勉学だけでなく人間的にも陶冶されたように思う。結果的に学科内で最も多くの単位を履修でき、大きな自信となった。凡人なりに少しは成長できただろうか。

太宰治の「津軽」にこんな文章がある「自惚れちやいけないぜ。岩木山が素晴らしく見えるのは、岩木山の周囲に高い山が無いからだ。他の国に行つてみろ。あれくらゐの山は、ざらにあら。周囲に高い山がないから、あんなに有難く見えるんだ。自惚れちやいけないぜ。」

私は就職で弘前を出て、より競争の激しい社会に身を置くことになる。自惚れちゃいけない。私は自分にできることを自覚し、これからも学び続けていきたい。

学生生活を振り返って

農学生命科学専攻　佐藤　望

弘前大学に入ってから早くも６年が経とうとしています。入学当初、埼玉から弘前での生活の変化に楽しみでありながらも、まるで違う国ではないかと錯覚するほどの寒さや、初めての一人暮らしなどで不安も少なくはなかったことを覚えています。学部時代で印象に残っていることは、部活でけがをした時のことです。普段の生活にも不都合が生じるケガで、部活を辞めてしまおうかとも思っていましたが、そんな時に助けてくれたり、励ましてくれた友人がいたからこそ、乗り越えて最後まで続けることができました。学部時代は、そういった仲間に恵まれた４年間でした。

大学院に入ってからの２年間は、いろいろなことに挑戦できました。生まれて初めての釣りや埼玉から弘前まで14時間かけて下道で帰って観光したこと、自分が幹事を務めて学科全体で球技大会を開催したことなど、弘前大学に来たからこそ、良い友人に恵まれたからこそできた経験だと思います。

就職先もまた初めて踏み入る土地で働くことになりそうですが、この６年間を糧に頑張っていこうと思います。最後に、先生方、友人たち、先輩方、後輩たち、私に関わって下さったすべての皆様に感謝致します。本当にありがとうございました。

卒業・修了・退職にあたって
教職員

長い間ありがとうございました

変わるもの　変えてはならないもの

人文社会科学部
文化財論講座
教授　須藤　弘敏

50年前、弘大キャンパスを通学路にしていた弘前三中生の私は、土曜の昼にはプレハブの生協食堂で70円のカレーライスをよく食べていましたが、ここに37年間も勤めることになるとは思いもしませんでした。カレーの味はずいぶん向上しましたが、文京町も本町もキャンパスはますます狭くなりました。今の総合教育棟中庭で混声合唱団が昼休みにきれいな歌声を響かせていたのは校舎改修前までだったでしょうか。そこも人文の中庭も昼休みには弁当を広げる人が毎日見られたのに、大学会館や教室にエアコンがついてからはその姿が消えてさみしい気がします。

変わったものと言えば、昭和の間は着ているもので町中でも弘大生とすぐわかったものですが、今は全くわかりません。教員についても教授会にジャケット着用というドレスコードがあったことを覚えている方はもういないでしょう。校舎や設備の充実は学生にも教職員にもありがたいことですが、予算の縮減が進む中、正規職員と教員数がますます減らされていく状況は残念です。弘前大学が良い意味での地方大学らしい地方大学であるよう願ってやみません。

いま、思うこと

人文社会科学部
情報行動講座
教授　奥野　浩子

大学入試センター試験の担当をした１月19日と20日。休憩時間に廊下ですれ違う受験生たちから「おはようございます」とか「こんにちは」と言われて、うれしさと懐かしさを感じた。この大学に奉職した頃は、担当する学生もそうでない学生も、廊下ですれ違う時にはこうだった。いつからか学生は挨拶をしなくなった。そして、いつからか挨拶代わりに「おつかれさまです」と言われるようになった。「おつかれさまです」は、学生同士、あるいは近しい先輩・後輩の間で交わされるものと思っていた私は、ゼミ生には、私に対しては使ってほしくないと伝えた。ある時の学部長に、「おつかれさまです」に困惑すると話したところ、『会社に勤めて社長にも言えるものでしょうかねぇ』と、私と同じ感覚をお持ちのようだった。ことばは生き物で変化することは承知しているが、いまだに挨拶としての「おつかれさまです」は受け付けられない。

同僚の先生たちや事務職員の方々に助けられ、若い学生たちから元気を分けてもらった26年間だった。定年退職を迎えることがめでたいのか、分からなかったが、自分がその身になって分かる。めでたいことなのだ。「無事に」定年退職を迎えられることは。

今は、私に関わってくれた全ての方に「こんな私に関わっていただきありがとうございました。おつかれさまでした」と言いたい。そして小さな声で自分にも「おつかれさまでした」。

退職にあたって

教育学部
技術教育講座
教授　小山　智史

平成元年11月に教育学部附属教育実践研究指導センター（後に教育実践総合センター）に採用され、平成25年４月からは技術教育講座の所属となりました。

私は障害者や高齢者などIT弱者を支援する技術（Assistive Technology）の開発を専門領域としています。在任中さまざまな方と関わりながら、いくつかの新しい技術を開発することができました。私のような者が大学の一角を担うことができたのは、大学の多様性の証でもあります。弘前大学にそのような自由度が一定程度担保されていたことに感謝しています。このテーマに関しては、今後は「当事者研究」としてささやかながら続けていきたいと考えております。良い研究成果が得られたら、これを読んでくださっている方々にも、いずれ「お裾分け」できるかもしれません。

授業は主に情報技術分野の科目を担当し、学生には「何かひと工夫」を求めました。教養の情報科目にも平成７年に必修になった時から関わりました。私自身は未だケータイ・スマホの類は持っておりませんが、退職の記念に家族がスマホをプレゼントしてくれるとのこと。野山を徘徊する癖があるので、万が一のことを考えてのことのようです。なるべく持参したいと思っています。

学生とゼミ登山を９年間続けました。写真はその時のもので、楽しい思い出のひとつです。

弘前大学の教職員の皆さま、そして私たちの未来を担う学生諸君の活躍をこれからも陰ながら応援しています。

多謝！

教育学部
家政教育講座
教授　日景　弥生

いよいよ職場を去る日が参りました。1981年10月、ここ弘前大学で社会人としての第一歩を踏み出しました。以来37年６カ月、講座の先生方をはじめ、多くの方々に支えて頂きました。感謝の思いでいっぱいです。

最も記憶に残っているのは、助教授になって初めての講義です。ある学生の「先生の講義はつまらない」との勇気ある苦言（?）は、教員としての力を付けるきっかけになりました。今でもその学生に感謝しています。

研究では、大学院時代から続けていた衣類に付着する汚れ除去に関する研究をまとめ、学位と某学会の奨励賞を頂きました。大学院設置に伴い家庭科教育学に移籍し、ジェンダー視点での学習効果等の分析や、学生の教師力向上について調査分析を行いました。

また、学内の男女共同参画に関わらせて頂いたことも忘れることができません。スタッフ達と、いつも試行錯誤しながら歩んできました。より働きやすく学びやすい環境の実現を期待しています。

さらに、学外の方々とも多くの出会いがありました。特に、初期の弘前市男女共同参画施策の全てに関わらせて頂きました。中でも思い出深いのは“弘前きらめき女性塾”です。

最後に、大学を取り巻く状況が目まぐるしく変わるなか、弘前大学のさらなる発展を祈念しております。ありがとうございました。

人に恵まれ、支えられての「卒業」

教育学部
社会科教育講座
教授　宮﨑　秀一

教育学部社会科教育講座（法学担当）に赴任したのは2003年。ちょうどこの年に小学校に入学した第二子が中学、高校を経て今春大学を卒業します。16年間は瞬く間に過ぎました。私自身はこの間教育・研究いずれにおいてもほとんど成長しなかったにもかかわらず、有能で尊敬すべき教育学部同僚、附属学校（特に兼務した小学校と特別支援学校）教職員、学部を超えた職員組合の同志、地元自治体の審議会委員やスタッフ、民間の研究会やボランティア団体の仲間など数え切れない方々との出会いと交流に支えられ、辛うじての「弘大卒業」です。

学生諸君にも感謝あるのみです。歴代の個性あふれるゼミ生からは、卒論で現代社会の諸問題を鋭く論ずる姿勢を通じて私の方が良き刺激をもらいました。今日、多方面で活躍する彼らの姿を見たり報告を受けたりすることほど誇らしいことはありません。顧問を務めたサークルteens & law のメンバーとは、家庭で困難を抱えた子どもの学習支援や非行少年の立ち直り、大学祭での模擬裁判の上演など貴重な地域活動の機会を共有できました。

今後は、弘前大学での経験を活かしつつ、別な立場から多少とも社会に貢献することで「母校」への恩返しができればと思っています。

二度目の定年

教育学研究科
教職実践専攻
教授　中妻　雅彦

珍しいことだが、２度目の定年退職を迎えることになりました。前任校（愛知教育大学）は、63歳定年でした。弘前大学では、２度目の定年ということになります。退職説明会も、関係書類も２度目です。２度目だからではなく、私のように、大学の仕事が中途半端な者には、定年の感慨というものは全くなく、今までの仕事に心が動くということもありません。もちろんやり残したという感傷もありません。ただし、大過なく過ごせて、学生とゼミや授業を楽しくできたと感じていられることが何よりの喜びです。

４年前の１月、年賀状に書いた「来年定年です」の一言が、巡り巡って弘前大学からのお話となり、２年間を過ごしました。私は、関東圏で多くの時間を過ごしてきたので、山が見える生活はとても新鮮で、喜びでした。アパートの北の窓から見える岩木山、弘前駅城東口からの岩木山、JR陸橋からの岩木山、教育学部４階北側からの岩木山、どれも素敵です。山というのは、安心する風景だと感じます。四季の移ろいが感じられます。温かさも、冷たさも、山の姿を通して感じることができます。暖かさ、寒さではありません。心の移ろいが感じられるのです。その周りに住む人々に思いをはせることが少しできたかなと感じていたら、２年間が経ってしまいました。

ありがとうございました。

退職にあったって

医学研究科
脳神経内科学講座
教授　東海林 幹夫

弘前大学医学研究科脳神経内科学教室は、平成18年１月に東海林が弘前大学に赴任して始まりました。この12年間に、約1,500人の医学生を教育し、青森県全域をはじめとして道南、北東北一円における唯一の大学附属病院診療機関として、約9,000人の外来患者と1,100例の入院患者を受け入れました。研究面では、注目されているAlzheimer病を始めとする神経変性疾患を対象に、病態解明と病態修飾薬の開発を行い、先端的なバイオマーカー開発やグローバル研究DIAN-Japanの立ち上げなど、弘前から世界に大きく発信できたことを光栄に思っています。また、多くの患者家族会にもご支援ができました。多くの海外研究者、国際研究機関・企業との共同研究を推進し、この面でも多くの成果を上げることができました。この成果は、新聞やテレビ、マスコミにもしばしば取り上げられました。弘前COI研究のご支援もできました。

多くの医学博士、専門医、講師、准教授、教授が当教室から巣立っております。弘前では教授として急がしい毎日でしたが、多くの方々に知己を得る事ができたことも喜びです。また、美しい春夏秋冬の弘前で家族とともに過ごすことができましたことに、心から感謝しています。皆様のたくさんのご支援にお礼を申し上げます。

弘前は第二のふるさと

医学研究科
病態薬理学講座
准教授　古川　賢一

大学院の在学中に大阪の国立循環器病センターの研究所に奉職して以来36年、ずっと教育研究者として過ごしてきました。大阪で８年、仙台で８年、しかし、弘前での生活は20年にもなりました。仕事人生の半分以上を弘前で過ごしたことになります。過ごした年月だけ見ても、弘前は十分第二のふるさとでしょう。

しかし、それだけではありません。大阪、仙台では職場と家庭の行き来ばかりで、職場・仕事以外での人付き合いは、皆無に近かったように思います。ところが、弘前に来てそれは大いに変わりました。仕事に関係しない交友関係が非常に広がったのです。それは写真や、音楽を通してであったりしました。そしてなにより、旅人としてではなく、そこに住む者として、厳しい冬を耐えたご褒美に、見事な桜の春、弾ける祭り（弘前ねぷた）の夏、そして燃えるような紅葉の秋が味わえた、そんなことも弘前を心のふるさとにしているように思います。

さて、私は３月に退職し、４月から１年間の客員研究員を経て、生まれ育った関西に戻りますが、“ふるさとは遠きにありて思うもの”の言葉通り、弘前の街や人をきっと懐かしく、折りに触れ思い起こすことでしょう。長い間、本当にお世話になりました。

定年退職にあたっての回顧と謝辞、遺言

医学研究科
脳血管病態学講座
講師　吉田　秀見

大学研究室の名称から先達の意志や願いを想像してきました。私の学部・大学院学生時代の所属研究室名はそれぞれ「海洋化学講座Laboratory of Marine Chemistry」と「海洋生産学部門Division of Marine Biochemical Science」であり、縁あって32年前に奉職した弘前大学での研究室名は「病態生理部門Department of Pathologic Physiology」でした。奉職先の英文名称は、その後の施設改組時に「Dept. of Pathological Physiology」へ、更なる改組（脳血管病態部門）や大学院部局化（脳血管病態学講座）で「Dept. of Vascular Biology」へと改称され現在に至ります。これらの英文名称は論文等を「世界に発信」するとき必須ですが、ご覧のとおり和文名称の直訳とは限りません。院生・教員両時代に所属研究室が新設・改称される機会に立ち会えました。その際、英文名称には研究室主宰者の志向がより強く込められる過程を拝見しました。そのような一事が万事にわたり、自由に学問をする雰囲気を高め、研究の自主性を後押しして下さったように思います。

お陰様で私は、学生として好きなchemistryやbiochemical scienceを海から学び、それらを教員として基礎医学（ヒトのbiology）の教育・研究に活かす道を歩かせて戴きました。途中で歩行者事故や多病等の困難にあっても救われてきました。関わって下さった皆様に深謝致します。

老兵は消え去ってもなお、“短命県において「地域と共に創造する」学府”に相応しくタバコ臭のない弘前大学を想像し続けることでしょう。

退職にあたって

保健学研究科
看護学領域
教授　齋藤 久美子

弘前大学にお世話になって、47年になります。最初は学生として今はなくなりました教育学部特別教科（看護）教員養成課程で学び、卒業後大学病院に看護師として就職しました。その後医療技術短期大学部、医学部保健学科・保健学研究科と教員生活を過ごしました。

医療技術短期大学部での23年の教員生活は、演習や病院での実習指導の時間が長く、先生方や学生さんたちとよく目指す看護について語り合いました。教職員も、食事会、スポーツ大会、勉強会など和気あいあいとした雰囲気の中で教育が行われていました。2001年から医学部保健学科の大学教育が始まり、短期大学部とはまた異なる教育を模索しながら過ごしました。医療環境・教育環境が変化する中、新しい看護の役割・教育を探りながらの日々でした。振り返ってみると、多くの教職員の方々、学生の皆さんと出会い、支えられ、今の自分があります。弘前大学で教育・研究生活を送ることができ幸せでした。今医療技術短期大学部、保健学科の多くの卒業生が、全国で看護職として活躍し、頑張っています。それを見るととても誇りに感じます。

最後になりましたが、在職中お世話になりました皆々様に深く感謝いたします。また、弘前大学の益々の発展を祈念いたします。

弘前大学での43年

保健学研究科
看護学領域
教授　西沢　義子

昭和51年４月に弘前大学医学部附属病院に就職し、その後、養護教諭養成所、教育学部、医学部保健学科・保健学研究科と43年にわたり、大きな病気をすることもなく勤務することができました。これも偏に皆様方からのご支援の賜物と感謝申し上げます。

看護師として２年間働いた当時はQOLという考え方は普及しておらず、患者さんとの関わりの中では悲しい思い出もあります。しかし、先輩からは沢山のことを学ぶことができました。近年は看護師の早期離職が問題となっていますが、その頃はとても楽しい毎日でした。間もなく教育分野に移りましたが、学生教育の難しさと喜びを感じながら日々励んで参りました。大学にまだまだゆとりがあった時代でした。教員と学生の距離が近く、今では卒業生のお世話になる年齢となりました。これまでの経験から、教育は人を豊かにしてくれることを実感しております。大学教育に関われたことは貴重な財産となりました。

授業評価、教員評価が導入され、自己を振り返るためには大変良いシステムですが、成果だけが重視されてはいけないと思います。現在は大学自体にゆとりがなくなっている状況ですが、教育は人を育てるとともに、自分も育てられていることを常に忘れたくないと思います。弘前大学の益々のご発展を祈念致しております。

弘前大学の皆さんに感謝

保健学研究科
生体検査科学領域
教授　木田　和幸

私は、理学部（当時）の学生として北海道から弘前大学に入学しました。最初は買い物をするときに、店員さんの津軽弁を聞いて驚いたのを覚えております。卒業後直ちに公衆衛生学講座の助手となりました。またしても全く知らない分野で戸惑いましたが、個性豊かな上司に恵まれ実践をもって教授された感があり、誠に有難く感謝しております。そして最後は保健学研究科・保健学科の教員として過ごしました。新しく設置された学科のためか学生や教職員の距離間が近く、親しみを感じる職場環境との思いで過ごすことが出来ました。今となっては教職員の皆さんや学生さんにはお世話になりながら弘前大学に通ったことを振り返り、これまでの色々な思いを引き起こすことができます。

学生さんや教職員の皆さんからは、若いエネルギーを注がれていたからこそ、ここまで弘前大学に通うことが出来たように思います。誠に感謝しております。

大学激動の時代に入り、弘前大学、保健学研究科は、今後より一層充実発展していくことを期待し、また願っております。

退職にあたって

理工学研究科
教授　稲村　隆夫

弘前大学には、旧理学部から理工学部に改組する際開設された、工科系学部創設準備室に室員として赴任致しました。赴任して早々学部改組を担うことになりましたので、赴任したての頃は右や左も分からず大変戸惑いました。特に、旧理学部に文化も考え方も異なる工学系の学科を立ち上げるという重責を担っておりましたので、初めは大変苦労致しました。室長の故大貫名誉教授や成田事務長並びに周りの多くの方々に助けられ、理学部から理工学部への改組、知能機械システム工学科の立ち上げも無事に完遂することができました。

大学の大きな使命は、社会に貢献できる学生を育て教育し世に送り出すことにあると考えています。弘前大学に赴任して以来、学部生及び大学院生共に四十数名を研究室から社会に送り出すことができました。記憶に新しいところでは、昨年の日本経済新聞に、採用を増やしたい大学の一位に弘前大学が選ばれたとの記事が載りました。これもひとえに、卒業生の皆さんが就職先で日夜一生懸命努力してきた賜物です。これまでの学部、学科の改組を含め教育に力を注いできた苦労が報われたように感じます。

それでは、弘前大学での23年間を通じてお世話になりました皆様に感謝申し上げますと共に、弘前大学が益々発展することを祈念いたします。

定年退職にあたり

被ばく医療総合研究所
放射線化学部門
教授　山田　正俊

2011年１月１日付で附置研究所として新設されたばかりの被ばく医療総合研究所に採用になり、12月下旬猛吹雪の中、家族と共に弘前に引越しました。１月４日に学長から辞令を戴き、弘前大学での教育・研究生活がスタート。ところが、赴任して早々驚きの連続でした。居室は臨床研究棟の一番端っこの部屋に他部門の教授と一緒に間借り。実験室はなし、各種放射能測定装置を含めて、実験装置・器具類もなし。要するに被ばく医療総合研究所は、学内に専用スペースは一切ないところからのスタートでした。そうこうしているうちに、赴任から約２ヶ月後の３月11日、東日本大震災が発生し、東京電力福島第一原子力発電所事故により大量の放射性物質が環境中に放出されました。この事故により当初の研究計画が大きく変わり、弘前大学におけるエフォートのかなりの部分を原発事故対応に充てることになりました。

赴任前に勤務していた独立行政法人（現：国立研究開発法人）は当然のことながらミッションオリエンテッドでした。大学はそれと比べて、研究の自由度があり、お金はなくともそれが大学の良さであると感じました。ところが最近どうでしょう。小所帯とは言え、みんな同じ方向を向かされ、ミッションに縛られ、外れれば弾き出されかねないような状況になっていないでしょうか。

短期間ではありましたが充実していました。弘前大学に大いなる謝意を表するとともに、弘前大学の益々の発展を祈念いたします。

感謝・感謝

医学部附属病院
医療技術部長
須崎　勝正

金木町という田舎で生まれ、弘前大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科１回生として卒業後、昭和55年（1980年）に当院に就職しました。青森労災病院にいた１年間を除く38年間附属病院にお世話になりました。一般撮影系を10年位、その他の部署を一通り経験し、放射線治療が放射線技師生活で１番長い部署となりました。撮影系はアナログからデジタルになり、フイルムが姿を消し、画像が院内配信され、モニターでの観察となりました。放射線治療は姑息的照射から根治照射になり、照射法も複雑になり高度精度放射線治療が多く行われるようになりました。

平成27年から診療放射線技師長を拝命し、平成29年からは医療技術部長が兼務となりました。技師長になった年は新人が７名入職し、業務を回すのがやっとの毎日で、新人が戦力となるまで半年間はみんなあまり有休をとらず頑張ってくださいました。放射線部の機器が高額でいろいろ事務の方々にはご迷惑をおかけいたしました。また、医療技術部では他職種の先生方にもいろいろご協力をいただきました。各科の先生や看護部の皆様、院内のすべての皆様に感謝・感謝でございます。

長い間大変お世話になりました。

退職にあたって

医学部附属病院看護部
副看護部長
木村　淑子

私と弘前大学とのご縁は、昭和40年、当時弘前公園内にあった小学校入学から始まります。弘前市内から少し外れた農村地域から一人でバスで通うため、母親から家に帰るバスの行き先名の漢字と、バス時刻を知るために時計の見方を教えられ、乗り間違わないように緊張して通学したことを鮮明に覚えています。

次の年、学校の移転があり、それに伴い小学生の私の行動範囲は広がり、毎日の通学が冒険でした。高校卒業後は弘前大学医療技術短期大学部看護学科に入学し、昭和55年４月、医学部附属病院看護師としての人生を始め、主に小児、消化器内科・外科の領域で勤務し39年間が過ぎました。

この半世紀もの間、世の中で何事か重大な事が起きても、安心して勉強、仕事や家庭生活を送ることができたのは、弘前大学という組織の一員として過ごせたからだと思います。弘前大学の職員であると自分を律することで道を間違うことなくこれた事、また仕事に没頭できるよう、様々な支援を受けていた事を、退職するに当たり遅まきながら悟った次第です。春から弘前大学を離れることは不安でもありますが、これからは弘前市民として弘前大学を応援してまいります。本当にありがとうございました。

定年退職を迎えて

医学部附属病院
看護師長
山本　葉子

1980年４月、弘前大学医療技術短期大学部を卒業し、希望通りの第一外科に入職しました。緊張で鑷子を持つ手が震え、さばきガーゼが渡せなかった初々しい思い出が蘇ります。

４年後、集中治療部が設立された事から、勤務異動し数回の部署異動はありましたが、通算で22年間、集中治療部で勤務しました。医療機器に囲まれ、緊迫した場面も多く、緊張感が常に漂う部署でした。しかしこの分野が好きで、とても吸収することが多く、クリティカルケア領域で勤務できた事は、誇りであり財産だと感じています。附属病院初の生体肝部分移植、補助人工心臓装着など、医学の進歩と共に多くの貴重な経験をさせて頂きました。

2003年には、感染対策担当看護師長として、現在の感染制御センターの立ち上げに関わり、病棟巡回に明け暮れ、院内マニュアル作りや、手洗い啓発・ゾーニングなど感染対策の実施に取り組んできました。

最後の５年は消化器外科病棟に勤務し、若いスタッフに気付きや刺激をもらい、また、患者様から学ぶことも多く、日々精進の毎日でした。

予想外の業務や、新たな問題に追われ、退職の感慨に浸る間もない状況ですが、これまでご指導頂いた諸先輩・同僚や多くの皆様のご支援を頂きましたこと、心から感謝いたします。ありがとうございました。

定年退職を迎えて

医学部附属病院
看護師長
二階 千津子

1980年４月採用となり、旧２外科（消化器外科・小児外科）に配属となりました。先輩の後を付いて仕事をしていると、医師から金魚の糞みたいと言われたものです。何でも知っている先輩が眩しく、自分は何もできないと悲しい思いで仕事をしていました。人工肛門増設患者の処置では、手袋を履くと患者さんに失礼と素手で便の排泄を行い、患者さんから手袋を履いてくださいと言われました。今の感染対策からは考えられない時代です。褥瘡処置ではドライヤーで乾燥させ真っ赤になった皮膚は今では信じられません。外科領域から内科領域を経験し、その後ゼネラルリスクマネージャーとなり医療安全の業務を担当しました。ここでは、他大学との交流、他職種と仕事をすることで多くを学ばせていただきました。

2004年看護師長となり、2008年脳神経外科・形成外科病棟へ異動し、看護師の働く環境が厳しく、業務改善に取り組みました。2016年から消化器・血液・膠原病内科、腫瘍内科病棟へ異動し二交替制勤務を導入、医師・他病棟の看護師の協力で、働き方改革に取り組みました。39年間支えていただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

今思い返せば・・・

参事役
放射線安全総合
支援センター担当
亀谷　禎清

私は昭和52年４月に弘前大学に採用されて以来、弘前大学一筋で定年を迎えさせていただくことになりますが、ちょうど平成という元号も最後の年を迎えることに何かしら感慨深いものを感じてしまいます。私が弘前大学に採用されて最初に配属されたのは教育学部でした。その頃の教育学部は学生入学定員が６課程で370名、教員数は現在とあまり変わらないものの、事務系職員に至っては現在の約３倍くらいの人員が配置され、まさに大所帯でした。そんな中で新人の私は、今の新採用の方々が気の毒になるほど本当に簡単な仕事のみを与えられておりました。その分有り余る体力は自然と運動の方に向かってしまい、お昼休みのバドミントンに熱中してしまいます。気が付くと職場に仕事に来ているのかバドミントンをしに来ているのか分からない職務専念義務違反状態になっていました。こんな私でしたが、やはり人には転機というものがあるようで、２度目の配属となった教育学部で巡り合った大学院教育学研究科修士課程設置の仕事が本当の仕事とはどういうものなのかを思い知らせてくれました。いわゆる設置審に向けた膨大な書類作成に学部長や事務長は勿論のこと教育学部教職員全員が一丸となって取り組んでいたことを今でも鮮明に覚えています。その後も理学部改組に伴う理工学部の設置、文理融合型博士課程の大学院地域社会研究科の設置等立て続けに設置審に向けた仕事に携わることができました。非常にやり甲斐のある仕事でしたが、経験を重ねれば重ねるほど上司や同僚の助けがなければ達成できないこと身をもって学ぶことができました。今思い返せば全てを含めて本当に充実した42年間でした。ありがとうございました

感謝の15年間

学務部学生課
課長補佐
澤田　祐子

平成16年４月１日、国立大学が法人化された日に日本学生支援機構からの出向という形で採用していただき、更に平成21年４月１日には職員として採用していただきました。

出向での採用当時から現在まで、本当にたくさんの方々にお世話になりました。

なんでも相談を担当していた方からは、「不登校になっている学生は、皆まじめで良い子」、「大学卒業だけが人生ではない、選択肢は多い方がいい」と教えていただき、その後縁あって、なんでも相談を担当することになった私の指針となりました。

その後も「苦しくなったら、早めに相談すること。ギリギリまでは我慢しないことも責任」、「迷ったら学生の立場で考える」などなど、様々な場面で多くの方々にアドバイスいただきました。

この場をお借りしまして、大学でお目にかかった全ての方々に心から御礼申し上げます。

また、日本学生支援機構の奨学金担当をはじめとして、授業料免除、総合文化祭、学内ワークスタディなど、学生と関わりの深い仕事に従事することができたこの15年間、大変恵まれた職員生活でした。

本当にありがとうございました。

退職にあたって

医学部附属病院
医事課医療安全担当
係長
成田　洋子

最初に採用されたのは宮城教育大学でした。単科大学なので、事務局ひとつで大学本部であり学部事務部でもあり、という体制でした。後になってみれば、新人で大学事務の全体を知るには良かったように思います。

その後弘前大学へ転任し、38年となります。振り返ると、事務職員は１人だけで上司も部下もいない、何をしているのか分からない、というような部署での勤務が多く、長かったので、総務・財務・学務などの大学事務職員のキャリアの常道からは大分外れて来たんだなと、今頃になって苦笑いをしています。それでも、卒業式の日に、覚えていない卒業生から「あの時はお世話になりました、有難うございました」とお礼を言われて嬉しかったとか、「こんなの事務職員の仕事じゃない」と思ったことが、何年も後に全然別の場面で役に立ったということもありましたから、まあまあそれほど無駄なことはなかったのかなと思えています。

そんなこんなで、あちこちで色々ご迷惑をおかけしてきましたが、その時々に受け止め、フォローして下さった皆様のおかげでなんとか無事定年を迎えられることとなり、心より感謝しております。有難うございました。

Laboratory introduction

作業療法学専攻教員一同

大学院保健学研究科
総合リハビリテーション科学領域
作業療法学専攻

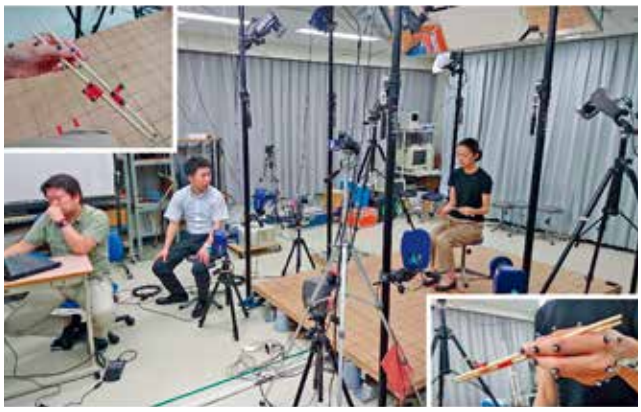
Ⅰ．はじめに

弘前大学大学院保健学研究科総合リハビリテーション科学領域の教員は、医学部保健学科理学療法学専攻、作業療法学専攻のいずれかに所属しており、このうち作業療法学専攻には計10名の教員(作業療法士８名、医師１名、生理学者１名）が所属しています。作業療法とは、身体的、精神的な障害を持つ人に、様々な作業活動を治療的に用い、障害の克服、社会生活への復帰、そして主体的な生活の獲得を目指すリハビリテーション治療の一つです。病気、外傷などによる身体的な障害に対するリハビリテーションに加えて、精神的な障害に対する「こころ」のリハビリテーションも作業療法の重要な分野です。当専攻では、身体障害分野、精神障害分野、基礎分野に分かれ研究活動を行っており、それぞれの研究活動について以下に紹介させていただきます。

Ⅱ．研究活動紹介

1．身体障害分野研究グループ

作業療法の定義（日本作業療法士協会）では、「作業療法は、人々の健康と幸福を促進するために、医療、保健、福祉、教育、職業などの領域で行われる、作業に焦点を当てた治療、指導、援助である。作業とは、対象となる人々にとって目的や価値を持つ生活行為を指す。」とされ、この中の「作業に焦点を当てた治療、指導、援助」については、「作業に焦点を当てた実践には、心身機能の回復、維持、あるいは低下を予防する手段としての作業の利用と、その作業自体を練習し、できるようにしていくという目的としての作業の利用、およびこれらを達成するための環境への働きかけが含まれる。」とされています。作業療法士が、手段、あるいは、目的として作業を利用するためには、「ひとが作業すること」、「作業の特性」などを科学的視点で捉え、技術・技能をもって関わることが重要です。作業療法士は、作業の優れた使い手であるからこそ作業療法士であると考えます。そのような思いから、対象者個々の「ゆ



身体障害分野研究グループの実験と様子

たかな生活･あじわい深い生活」のために、作業を分析し、作業療法士の技術につなげる研究を行っています。その内容は、「生活行為における身体運動・動作の解析とその治療への応用に関する研究および福祉用具の開発に関する研究」として、「箸操作における箸の動きと手指動作の解析と訓練方法の開発」、「左利きのひとの書字動作の解析と利き手交換訓練の開発」を進めています。

また、対象者が「ゆたかな生活・あじわい深い生活」を営むためには予防的介入が重要であるため、「地域住民の健康増進・介護予防に関する研究」として、「健康度に影響を及ぼす要因の解析」、「健康づくり活動に関する研究」を進めています。

2．精神障害分野研究グループ

精神科作業療法は、精神障害者の生活障害の改善をとおして社会復帰を支援します。現代社会は、高齢化や人口減少、労働人口の減少などの社会構造の変化に伴い、そこで生活する人々のストレスの増加、自殺者の増加などメンタルヘルスへの注目度が高まっております。このような状況の中で、精神科作業療法の対象は広がっていくと考えられます。精神科作業療法研究室の構成員は、教員５名、大学院生６名、学部学生17名です。大学院生は全員が社会人であり、留学生１名の他は普段作業療法士として臨床で働いています。また、勤務先も単科精神病院、介護老人保健施設、作業療法士養成校などで、一様ではありません。一方、教員の専門も一様ではなく、精神障害作業療法および身体障害作業療法であることから、こころと身体の両側面からの意見交換や情報交換ができるメリットがあります。研究室で取り扱う研究テーマは、統合失調症患者の生活技能やQOLについての研究、精神障害者の体力に関する研究、認知症高齢者の社会参加に関する研究、介護老人保健施設入所中の認知症高齢者の生活活動に関する研究、脳卒中患者の抑うつ状態に関する研究、学生の不安やストレスの研究など多岐にわたっており、障害種別に関わらず、精神的な困難を抱えている人が健康的な自律した社会参加を獲得することを推進するための研究を行っております。

精神障害分野研究グループの教員と大学院生

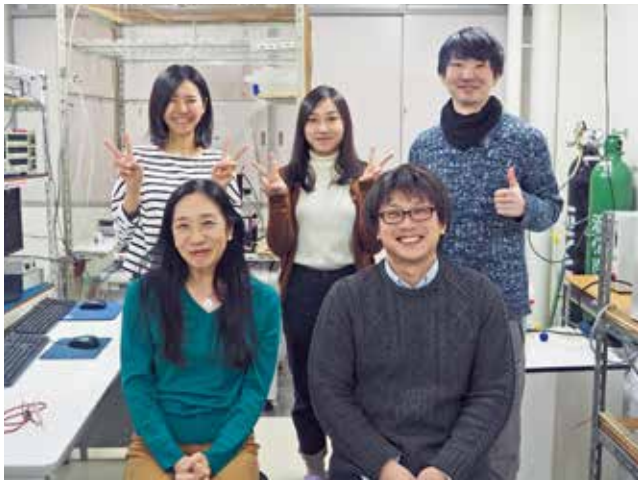
3．基礎分野研究グループ

基礎研究分野グループでは機能回復は“脳回復”であるという考えの基、脳科学的視点から運動麻痺、発達障がい、てんかん、など脳に起因する病態に関する研究を行っています。メンバーは生理学者と作業療法士で構成される教員３名の他、作業療法士、英語教師として働く社会人大学生です（博士後期大学院生３名、博士前期大学院生１名）。このようにさまざまな専門家が集まりいろいろな視点から研究をしています。

現在リハビリテーション分野では“根拠に基づいたリハビリテーション”が注目されています。脳損傷後のリハビリテーションは患者さんのQOLを高めるうえで大変重要ですが、いつからどのようにどのくらいの介入を行うのが最も効果的かという事は未だ確立されていません。なぜなら脳の障害もそれに伴う麻痺も人それぞれで、脳の細胞レベルでの出来事を知ることはできないからです。そこで私たちはモデル動物を用いて細胞レベルから行動レベルまで生理学、分子生物学、形態学的手法を駆使して研究をしています。現在、脳卒中モデル動物を用いた機能回復のメカニズムの研究で、モチベーションを伴う訓練の方が強制的に行う訓練より早期に回復するという結果を見出しました。それは何故か？というのが今後の課題です。

また、一方でヒトの発達障がいへの早期介入、早期治療法の確立を目指した病態研究も行っています。動物を使った基礎的研究の他、実際のお子さんたちの動きの解析や保護者、教師からの質問紙調査などを通じて発達障がいの病態を解析しています。

これら基礎研究の積み重ねにより、少しでも多くの患者さんたちが笑顔で楽しく生活していかれる手助けをしたいというのが私たちの願いです。



基礎分野研究グループの教員と大学院生

Ⅲ．おわりに

日本は世界のどの国も経験したことのないような本格的な高齢社会を迎えようとしています。身体的・精神的な障害をもつ高齢者の増加が予測される中、リハビリテーションの重要性は今後ますます増大していくことでしょう。当専攻では、リハビリテーション科学の進歩・発展に寄与できるように今後とも積極的な研究活動を進めていきたいと考えております。

\new face/

新任教員紹介

教員が新たに加わりました

医学研究科　救急・災害医学講座　教授　花田　裕之

平成31年１月１日付で医学研究科に採用されました。宜しくお願い致します。救急災害医学に関する教育研究診療を担当しますが、青森県内で数少ない救急医を有効に生かせるよう、青森県全域を見据えた救急医療を展開し、救急医療レベルの底上げをしていきたいと考えております。原子力関連施設が数多く存在する青森県では、原子力災害医療に対する体制整備・充実も弘前大学救命センターの大きな役割であり、正しい知識と医療技術の啓蒙普及にも努めていきたいと考えております。

医学研究科　脳卒中・血管内科学講座　講師　山田　雅大

平成31年１月に着任いたしました。本学出身で平成29年まで医学研究科循環器腎臓内科に所属しておりました。１年間、国内研修として熊本で弁膜症などの構造的心疾患に対するカテーテル治療を勉強し弘前に戻ってまいりました。得られた経験を活かしこれからの診療、研究、教育に臨んでいきたいと思います。

医学研究科　健康と美　医科学講座　助教　鄭　松伊

平成30年11月１日付で医学研究科健康と美　医科学講座の助教に着任させていただきました鄭松伊と申します。2014年に筑波大学大学院博士終了後、国立長寿医療研究センター老年学・社会科学研究センターの予防老年学研究部で研究員をしていました。弘前大学では生活習慣やメンタルヘルスに寄与する新しい予防策の探索、実践と基礎をつなぐ応用性の高い研究をしていきたいと思っています。

医学研究科　食と健康　科学講座　助手　安藤　雅峻

平成30年11月に着任しました、安藤雅峻（あんどうまさたか）と申します。こちらに転職する前は、理学療法士として横浜市内の総合病院に勤めていました。大学院では老年学を専攻し、これまで主に高齢者の身体機能・生活機能に関する研究に取り組んできました。チームアプローチの経験を活かし、様々な領域の方々と協働しながら、地域の健康づくりへ向けた研究・実践に携わりたいと考えています。よろしくお願い致します。

医学研究科　食と健康　科学講座　助手　杉村　嘉邦

平成31年１月付で食と健康　科学講座助手に着任いたしました。これまでは、運動指導を中心に地域の健康づくり支援（親子体操や生活習慣病予防、介護予防など）に携わってきました。健康は、ますます必要となってくる分野だと考えています。

これまでの経験を活かしながら、地域の健康増進について、考え取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

医学部附属病院　集中治療部　助教　野口　智子

平成30年12月付で医学部附属病院集中治療部に着任いたしました。大学病院の手術麻酔を中心として、集中治療や外来診療に携わっております。昨年麻酔科専門医を取得し、今後はサブスペシャリティー領域での専門医獲得を目標に精進していきたいと思っています。また、生まれ育った青森県の地域医療に貢献するとともに、後進の指導にも励んでいければと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

平成30年度弘前大学学生表彰を実施

本学では、研究活動や社会活動、課外活動で活躍した学生及び学生団体を表彰する学生表彰表彰式を平成31年３月７日（木）大学会館３階大集会室で行いました。

今回の受賞者は、課外活動等で活躍した２団体、研究活動や課外活動で活躍した学生10名で、表彰式には各研究科長・学部長、指導教員及びサークル顧問教員も出席し、佐藤学長から学生１人ひとりに表彰状と記念品が贈呈されました。

佐藤学長から、「皆さんの表彰対象となりました成果を挙げたこと、心から讃えたいと思います。そして、そのことに敬意を表し、私自身も大変名誉に思っております。この表彰のことを大いに誇りに思っていただいて宜しいかと思いますが、しかし、それで終わる訳ではありません。このような表彰を得ること、あるいはこのような成果を上げることは、皆さんの中でもそれ自体が目標ではないと思います。もっと、目標を高いところに置いて、一層、研鑽を積まれることを期待しております。また、皆さんの存在が周囲の学生の励みになるようにして良いのではありますが、そのことを過度に驕ることなく、謙虚にこれからも努力していただきたいと思います。」と学生の功績を讃える言葉が贈られました。

受賞者を代表して、人文学部現代社会課程４年の水無保乃香さんが「私達、弘前大学の学生が各々の志を達成するために非常に恵まれた環境で、学問・課外活動・部活動等を極めることができていることを実感しております。また、私達の学内外での活動は自分だけの力ではなく、佐藤学長をはじめとする多くの大学関係者の方々、そして、友達や家族、地域の方々に支えられてできていたことであるとも実感しています。今後も私達が弘前大学の学生であるという誇りと自覚を胸に志を高く持ち、各々の活動に励んでいきたいと思います。そして、いつか弘前大学での学びが実を結び、社会のため、人のためになることを信じて、自信をもってこれからの人生を歩んでいきたいと思います。」と謝辞を述べました。

佐藤学長（前列右から５人目）と受賞者ら

平成30年弘前大学学生表彰採択一覧

【団　体】

課外活動で特に顕著な功績があった団体

No.	団　体　名	受　賞　理　由
1	医学部ラグビー部	第61回東日本医科学生総合体育大会にて準優勝
2	競技ロボット製作所	第30回知能ロボットコンテスト 準優勝（あすなろ賞）

けいじばんコーナー

【個　人】

研究活動で特に顕著な成果を挙げた学生

No.	氏　　名	受　賞　理　由
1	木村紗也佳	「非自己一本鎖 RNAの分解メカニズムの解明」に関する研究を行い、研究成果は免疫学分野で古くから一流紙と認められているアメリカ免疫学会発行のJournal of Immunology に掲載された。

課外活動で特に顕著な功績があった学生

No.	氏　　名	受　賞　理　由
1	神田湧之介	平成30年度東北地区大学体育大会　弓道競技男子の部　個人優勝
2	藤本　智朗	平成30年度東北学生柔道体重別選手権大会　90kg級　優勝
3	鈴村　隆介	第33回北部地区国公立大学選手権水泳競技大会　　男子100m平泳ぎ　第１位
4	横山理久斗	第61回東日本医科学生総合体育大会　　空手道　男子　個人形　優勝
5	岩渕　那海	第61回東日本医科学生総合体育大会　ソフトテニス　女子ダブルス　準優勝
6	市沢　歩美	第61回東日本医科学生総合体育大会　ソフトテニス　女子ダブルス　準優勝

その他、特に優れた業績、功績等があったと認められる学生等

No.	氏　　名	受　賞　理　由
1	遠藤　　凌	青森県初、本学初の国際化促進インターンシップ事業に採択され、現地マレーシアにて日本メーカーへの売り込みを行うなど実際のビジネスに取り組み、受け入れ先マレーシア企業から「律儀にそして誠実に課題をこなすことができていた。」と高い評価を得た。
2	杉本　　芽	本学では開講されていない科目も試験科目に含む2017年度法学検定試験スタンダード<中級>コースにて、最優秀賞（全国１位）を受賞した。
3	水無保乃香	日本とオーストラリアの司法アクセスの比較研究を行い、この研究が日本弁護士連合会の目に留まり、第28回司法シンポジウム「司法における国民的基盤の確立をめざして－司法を強くする４つの取組から考える－」に学生としては異例の登壇者として招かれ、発表を行った。

編集後記

4月に編集委員の仕事を戴き、早1年が経とうとしています。今年を振り返りますと、春号の頃は例年並の天候でしたが、秋号の頃は予想より暖かくなかった夏であったことがお米の収穫の情報から判りました。冬号の準備期間では、久方ぶりの白くないクリスマスであったことが記憶に残っています。編集が本格化した年明けにはつけを払うかのように本格的な雪化粧になり、結局辻褄は合わせられることを再確認しました。

平成の締めくくり年度の最後の号を送り出すにあたって、卒業・修了・退職の原稿の取扱でも思うところが多々ありました。新たな世界に飛び立つ学生さんには激励の言葉を、また大学でのお勤めを終われた教職員の皆様には労いの言葉をお送り致したいと思います。

（丹波）

生協オリジナル弁当容器の リサイクルに ご協力ありがとうございます。

弘前大学生協
2017年3月～2018年2月の
弁当容器回収率は
92.35%でした！

出荷量2326.93kg 回収量2148.90Kg
※東北地区で2番目に多い回収率です。

弘前大学生協は生協オリジナル容器の リサイクル活動に取組んでいます。

回収された容器は山形県にあるリサイクル工場「ヨコタ東北アメニティセンター」へ。
ヨコタ東北アメニティセンターでは福祉施設が参加しているので、障がい者雇用の促進にも繋がります。

食べ終わった弁当容器は
写真のようにフィルムを剥がして
生協店舗へお持ち下さい。
1個につき10円返却いたします。

※お買い上げ時にレジにて容器代10円をお預かりしています。

お手元の弁当容器を「ゴミ」として捨てるのではなく、「資源」として活用しましょう！

容器代で応援しよう！

弘前大学生協では弁当容器返金分を募金としてお預かりする取り組みをしています。平成30年度では「西日本豪雨緊急支援募金」へ196,983円（うち弁当容器募金分14,250円）、「北海道胆振東部地震災害支援金」へ116,616円（うち弁当容器募金分7,880円）を送金させていただきました。

現在は扶養者を病気などで亡くされた学生のための緊急援助「勉学援助制度」への募金として受け付けています。募金分の弁当容器回収はサリジェ入口と保健学科Cloverにて受け付けていました。ご協力よろしくお願いいたします。

弘前大学ご卒業をお慶び申し上げます。

平成30年度の金木農場産米を使用し醸造された**日本酒「弘前大学」**が、1月28日に発売されました。
口に含むとふくよかな香りがし、飲み口はすっきりと柔らかく、日本酒を初めて飲む方でも飲みやすいお酒です。

今後のご活躍が期待される卒業生の皆様にも、様々な場面でご愛飲いただければ幸いです。

※写真は「弘前大学徽章入りグラスセット」になります。

弘前大学オリジナル 日本酒「弘前大学」1本 2,143円（720ml）

●日本酒「弘前大学」は下記店舗でお求めいただけます。※弘大生協ホームページからもご注文いただけます。

弘大生協 サリジェ TEL 0172-34-4622 / SHAREA TEL 0172-33-3742

弘前大学は２０１９年５月に
創立70周年を迎えます

さあ、次の実り。
70
弘前大学創立
70周年記念

弘前大学
学園だより

vol.195／2019年３月発行
編集：国立大学法人弘前大学「学園だより」編集委員会
委員長／平野　　潔（教育委員会）
委　員／横地　徳廣（人文社会科学部）
鈴木　愛理（教育学部）
丹治　邦和（医学研究科）
牧野　美里（保健学研究科）
丹波　澄雄（理工学研究科）
大河　　浩（農学生命科学部）
澤田　祐子（学生課）
成田　勇一（学生課）
印刷：コロニー印刷

弘前大学　検索

トップページ▶大学案内▶刊行物▶学園だより
バックナンバーをご覧いただけます。

学園だよりに関するご意見がございましたら、下記のアドレスまでお寄せ願います。

弘前大学学務部学生課　e-mail:jm3113@hirosaki-u.ac.jp